

○ 畫家となりし紀念の畫

黒田清輝氏の談

誰も知る筈がないと思つたら意外の新聞種となつたには驚いた、イヤ此畫に就ては斯う云ふ因縁がある、千八百八十九年即ち明治二十二年に余は佛國巴里のボーシラールと云て東京なら新宿とも云ふべき僻鄙な地に今日では有名な大家、當時書生たりし米國人の彫刻家並畫家など、畫室を隣にして同棲し學生々活をしたが其年は博覽會もあり巴里も非常な賑ひで余は此開會中に和蘭に旅行した、到る所古名家の繪畫を觀て大いに感ずる所あり巴里へ歸るや和蘭風の畫に意動こごきて支へられず、終に發して此畫となつた次第である、畫中の人物は友人久米桂一郎で、同人が菊の寫生し居る所を余が寫生したもので



黒田清輝《画室にての久米桂一郎》久米美術館蔵

畫も拙、圖も平凡ではあるが、紀念の意味を含むもの故二十六年歸朝に際し持ち還つた然るに其頃父の歌友に會津人で鋤柄清雄と云ふ者あり常に宅に出入したが、同人の望みに任せ此畫を贈つた、其後同人不幸に不幸を重ね流浪して北海道に渡り數年前に病死したさうだ、余は同人の事を思ひ出すと共に此畫を聯想したが、今では何れドコかの古道具屋にでも曝され居ると左程氣にも掛なかつた所が妙などもあればあるもの、美術學校の生徒で兒玉と云ふ人がある、其人の寄宿し居る家に余の畫があると云ふので、余は一見を望んだ所豈に計らんや十五年

前鋤柄に贈つた此畫であるので、昔時巴里で初めて畫家となつた紀念であるから懇望して代ふるに余の新作を以てした、扱も如何なる緣故で此畫が此家に廻り廻つて來たかと聞くに、同家は鋤柄とは友人の間柄であるので鋤柄の娘は同家に厄介となつて居る關係が知れたこれに就てモ一ツ思ひ起すは之も鋤柄に贈つた繪畫で、巴里留學中久米と共に徒步旅行して獨逸境に到り或家で晝食した、此一室に掲げられた畫は古き石板畫で、圖は老人達が打ち集ふ和氣霽然たるものである、如何にも古風で妙味があるので強ひて譲り受け日本の金なら七八十錢で買つた、此畫も鋤柄にやつたのであるが序に鋤柄の娘に聞き合はせると今は神戸の知己の許に在るとやら、これも紀念の一つであるから機會もあつたら譲り受けたと思つて居る、因みに此圖中張ませの扇面に余が落款あり落款のあるべき位地に年號が書いてある、人には一寸分り悪い云々

『報知新聞』明治四〇年三月九日

本文獻が掲載された『報知新聞』の第二面に「画中有画、画外有画」と題して表題作品の図版が掲げられており、それによりこの画が現在、久米美術館が所蔵する《画室にての久米桂一郎》であることがわかる。ヴォージラール街で黒田と画室を隣にした「米国人の彫刻家並画家」とは、ポール・バートレット (Paul Wardele 八六五～一九二五年) と「日本芝居の初見物」(本書九九～一〇六頁)にも登場するウォルター・グリフィンの二人(久米桂一郎「仏国修学時代の黒田君と其制作」『中央美術』一〇二二大正三年二月)。バートレットの父、トルーマン・バートレット (Tuman H. Bartlett 八三五～一九二三年) はグリフィンの米国での師であり、ミレーの伝記執筆のためバルビゾンに住み、黒田も当地でその世話になつている(墓信祐爾「研究資料 公刊『黒田清輝日記』(下)『美術研究』三八九平成二八年六月)。